

ウーヴェ・ティムの『蛇の樹』における ポストコロニアルおよび インターカルチュラル文学としての諸相

Zu postkolonialen und interkulturellen Aspekten in Uwe Timms *Der Schlangenbaum*

副 島 美由紀

1. はじめに

ドイツの68年世代を代表する作家の一人であるウーヴェ・ティムには、ポストコロニアル三部作と呼ばれる作品がある。まずティムの第2作目の小説で、1976年に発表された『モレンガ』¹、次に1986年発表の第5作目である『蛇の樹』²、そして第7作目の『ヘッドハンター』(1992)³である。そのうち『ヘッドハンター』は、主人公が趣味としてイースター島に関する文献を読み、最後にイースター島を訪れてはいるが、実際には金融詐欺師を扱ったドイツに関する物語である。従って実質的にポストコロニアル文学としての内容を持つのは前二作であると言えよう。筆者が以前の論考で扱った⁴『モレンガ』は、ドイツ帝国時代の植民地であるドイツ領南西アフリカ(現在のナミビア)を題材としており、「ドイツで最も興味深いポストコロニアル文学」⁵と呼ばれるほど評価が高い作品である。『蛇の樹』は『モレンガ』とは全く違う手法で書かれているが、様々な要素の綿密な構成によって読者の心を捉える力を持ち、ティムの作品中重要な位置を占めると思われる。本稿はその『蛇の樹』を取り上げ、そのポストコロニアル文学およびインターカルチュラル文学としての諸相を紹介しつつ、作品が持つ力にとってなるべく正当な解釈を試みるものである。

2. ドイツにおけるポストコロニアルの「特殊な道」

本稿のタイトルにもあるポストコロニアルという呼称は、ここ数年のドイツ文学研究においては実は次第に衰退しつつある。それには概念の流行と衰退という現象と共に、ドイツ独特の事情が関わっていると思われるので、まずそれについて簡単に説明しておきたい。

ドイツ文学研究において他者および異文化との関わりを巡るディスコースは、旧来から重要な構成要素であった。特にE・サイードの『オリエンタリズム』による問題提起によって他者および異文化の名状と自己のアイデンティティとの補完的関係が意識されるようになってから、他者性を巡る問題はさらに重要性を増し、従来のいわゆる“第三世界”との関わりを持った創作や作品研究は主に“ポストコロニアル”という概念を使用して行われるようになった。さらに1990年以降、ドイツの再統一とナミビアの独立によってドイツの植民地支配の記憶が覚醒されて以降は、ドイツにとってのコロニアルおよびポストコロニアルな社会が歴史研究や文学研究の対象となっている。

しかし植民地支配の歴史が30年余りと短いドイツの場合、そのポストコロニアルの様相は、数百年に渡って多くの植民地、言い換えれば政治的に隣接した異文化が存在していたイギリスやフランスと比べ、次に挙げるような幾つかの点において異なっている。

- 1) ドイツの公式な植民地支配は1885年から1918年までであるが、ドイツ社会における理想の海外領土についての盛んな植民地主義的ディスコースは、むしろその前後の時期に長く存在していた。特に第三帝国時代には、失った植民地の奪回を目論むナチスの世界政策の下に、ドイツ帝国時代にも勝る植民地獲得のプロパガンダ作戦が文学や映画のメディアにおいて行われている⁶。従って、ドイツにとっての“コロニアル”は、長期にわたって“植民地なき植民地主義”と言うべき歪なものであった。
- 2) ドイツの知識人層は第二次世界大戦後、ナチズムによる犯罪の検証と反

省に多くの知的および感情的エネルギーを費やさざるを得なかったため、過去の植民地支配の集団的記憶は極端に周辺的な位地に追いやられてしまった。よってドイツにおけるコロニアルなディスコースの精神的遺産とポストコロニアル社会についての理解は、関係性が希薄である。

- 3) ドイツ帝国はその唯一の入植植民地であった「ドイツ領南西アフリカ」において原住民に対するドイツ語教育を制度的に行わなかったため、かつての植民地の住民が宗主国の言語メトロポールを使用して自己表現を行うという、イギリスやフランス、スペイン等のポストコロニアル社会で普通に起きている現象がほとんど生じることがなかった⁷。

以上のような状況はドイツの文学研究者によって、歴史学の用語に倣って「ポストコロニアルにおける『ドイツの特殊な道』」と呼ばれたりする⁸。つまり、ドイツの文学研究におけるポストコロニアルの言説には、理論形成の面においても実践の面においても、ある種の「居心地の悪さ」⁹が付きまとうのである。

3. ポストコロニアルからインターカルチュラルへ

グローバル社会において、他者および異文化は急激に接近しつつある。企業は海外進出によって異なる政治・企業文化との接触を余儀なくされ、個人による旅行や休暇先での異文化との接触は数限りなく起きている。それらは幸福な邂逅ばかりではない。ドイツ国内を見ると移民が統合されずに独自のエスニック・コミュニティを作っているという「平行社会 (Parallelgesellschaft)」の問題が危惧されるようになり、2006年にはデンマークで起きた「ムハンマド風刺漫画掲載問題」に刺激されたドイツの若きイスラム教徒たちによる「ドイツ鉄道爆破未遂事件」も起きている。また、アフリカからの難民が押し寄せる地中海のランペドゥーザ島がEU全体の問題となる一方で、ネオナチも未だにアクチュアルな問題であり続けている。グローバル化によって増大したこのような他者との近接性や問題の緊急性、また前述の「居

心地の悪さ」を反映して、ドイツ文学研究の場ではポストコロニアルという用語が次第に衰退し、代わって「インターカルチュラル」という呼称が優先されるようになってきている。「インターカルチュラル文学研究」は、広義には「文学研究者がその研究において文化の違いについて、あるいは文化の境界を越えて思考する時、いつでもどこでも存在する」¹⁰もので、狭義には、文化を接触や交換、紛争の場と見なし、ポストコロニアルおよびポスト構造主義的な認識を「解釈学的意味における対話性と結びつけるもの」¹¹と見なされている。

文学理論家のM・ホーフマンによれば、インターカルチュラルなドイツ文学研究が対象とするのは、「ドイツ文学における他者の表象、およびその表象と、力と権力に関するパースペクティブなしでは考え得ないような出会いの文脈におけるドイツ人の自己定義との関係」¹²ということになる。その実践はテキストの創作、評論、分析のかたちで行われ¹³、「統一された方法や特別な方法があるのではなく、様々な方法で構想された試みやモデルの集合があるのみである」¹⁴しかしこの文学研究の志は非常に高い。インターカルチュラル文学研究は、例えば内省的には「異文化との対話によって自らのパースペクティブの限界を知り、自らの行動規範の代替案を創案し、可能ならばそれを実現出来るように批判的に熟考すること」¹⁵を目標としている。また、次のようなことも自らの社会的課題として掲げている。「国際関係の経済化(Ökonomisierung)に抵抗し、ネオリベラリズムのジャルゴンにおいてはただ潜在的な商談の相手または消費者としてしか見なされていないような人々を文化の担い手として捉え、それらの諸文化との対話を促進すること」¹⁶である。

これほど野心的ではないとしても、同様の方向性を持つものとして、ガダマーの解釈学に受容美学の視点を取り入れた「他者の解釈学(Fremdhermeneutik)」¹⁷や「異文化解釈学(Hermeneutik der Fremde)」¹⁸、異文化間の理解に哲学的な関心の重心を置く「インターカルチュラル解釈学(interkulturelle Hermeneutik)」¹⁹等の解釈方法がある。そして従来はコロニアル

およびポストコロニアル文学として捉えられてきた作品、例えばJ・コンラッドやウーヴェ・ティム、ハンス・クリストフ・ブッフ（Hans Christopf Buch）といった作家の作品、あるいはゲーテの『西東詩集』やレッシングの『賢者ナータン』等を「他者の解釈学」あるいは「インターカルチュラル文学研究」の切り口によって再読する試みがなされている²⁰。

ウーヴェ・ティムの『蛇の樹』はまずポストコロニアル文学として読まれるべき作品である。ホーフマンの理論が述べているように、インターカルチュラル文学研究において現代文学を論じる場合も、まずはポストコロニアルという文脈において諸事情の関係を捉えねばならない。「インターカルチュラルな関係性は、近代以来、主に植民地主義という現象によって特徴づけられる緊張関係の磁場で生起している」²¹からである。では、ポストコロニアルとインターカルチュラルという局面は、『蛇の樹』の場合どのように重なり合っているのだろうか。以下ではまずこの小説の概要を示し、さらにそれら二種の諸相の解釈を紹介していきたい。

4. 裏切られる期待

『蛇の樹』は南米におけるドイツ人技師の体験を描いた小説である。主人公のヴァーグナーはハンブルクの大手建築会社に勤める建築技師で、教師の妻と一人息子との家庭を持ち、立派な持ち家もあって社会的には安定した暮らしをしていた。ある日彼は南米のある国における建築プロジェクトを現場監督として引き継ぐことになり、単身で南米に赴任する。小説の舞台となる国の名は作品中一度も明示されることはないが、文中の様々な暗示からアルゼンチンであることは明らかである。そのアルゼンチンがパラグアイおよびブラジルと国境を接する辺境の地で、ドイツ連邦共和国の借款によって建設中の製紙工場を完成させることがヴァーグナーの任務だった。

南米には子供時代からの憧れがあった。J・コンラッドの『闇の奥』を読み、自分もジャングルを訪れてみたいと思った時期もあった。しかし実際に

訪れた南米は彼の想像とは異なっていた。まず、任地である辺境の州へ向かう途上、飛行機と同乗者たちの多くが洗練されたヨーロッパ風の外見をしており、自分が想像していたほどインディオの雰囲気が感じられないことに、彼は幾ばくかの失望感（7）を抱く。また、空港で彼を迎えたのはドイツ系三世の運転手で、その強いアンデス流ヘッセン訛りのドイツ語をヴァーグナーはほとんど理解することができない。彼の家政婦のゾフィーもロシア革命を逃れてきたロシア系ドイツ人の子孫だ。終末論を説くセクトの一員である彼女が始終黙示録を引用してヴァーグナーの耳を煩わせるので、彼はこの両者がむしろ「ドイツ語話者でなければ良かった」（10, 51）と思わざるを得ない。

彼が目にする風景も想像通りとは言い難い。くすんだ色の乾いた草地や赤褐色のむきだしの大地を見て、彼は再び失望を味わう（10, 212）。他方、彼の邸宅は緑豊かな高級住宅地、“緑の丘”と呼ばれる地所にあり、自動拳銃を持った兵士とコンクリートの壁によって小屋のような住居が建つ外界から隔てられ、護られている。“緑の丘”の住民は裕福な現地人の家族とユグヤ系住民、外国人たちで、例えばヴァーグナーの隣人はアメリカ人の農学者である。おのずとヴァーグナーが接する相手は限られる。まずは会社の経理を担当する如才ないブレドウ、建築副主任のシュタインホルスト、若いドイツ人技師のハルトマン、そして現地人通訳のフアンである。フアンは隣国パラグアイの軍政を逃れて来たインディオで、幼少時にメノナイト派のドイツ系移民に教わったという低地ドイツ語を話す。しかもベルリンに留学して文化人類学を学んでおり、仕事の傍ら論文を執筆中だった。ヴァーグナーは他のドイツ人たちと親称で呼び合うことを嫌う一方で、フアンとは自分の方言で気の置けない内輪話が出来ることを喜ぶ。

“緑の丘”には“ドイツ人コロニー”と呼ばれるドイツ系住民の大きなコミュニティが存在し、ヴァーグナーもすぐに招じ入れられる。コミュニティの社交場はヴィルヘルム時代のそれのようで、中心人物は軍人のクラマー大佐である。ドイツの軍事アカデミーで研鑽を積んだドイツ系二世の大佐は、町

一番の実力者でもあった。数年前に反政府蜂起が起きた後に市長職が廃止され、まだ若い大佐が地方総監として全権を委任されたのだ。この時、国の最高機関はフンタと呼ばれる軍部評議会で、反政府的と思われる市民に対して“汚い戦争”と呼ばれる対国家転覆活動戦争を行っていた。ヴァーグナーはクラマー大佐に対して生理的嫌悪感を覚えるが、大佐の知遇を得ることは極めて重要だった。辺境の州でも軍が市民の活動を監督しており、クラマー大佐なしでは「何事も立ちゆかず、彼がいれば何でも可能になる」(92)とされているからだ。そしてクラマーの他に彼に強い印象を与えたのはドイツから逃れてきたナチスの残党である。イスラエルの復讐の手が伸びてくるのを恐れ、要塞のような家の中で暮らしているかつての親衛隊大佐、クラークスである。他にも裕福な医者や実業家たちの話から、彼らが壁の外側の人間から反感を持たれていることが伺える。ヴァーグナーはおよそ自分の住まいを居心地よく感じるができない。

5. 不穏な始まり

製紙工場の建設は元より容易ではなく、現場監督も二度交代していた。最初の監督は反政府ゲリラに誘拐され、解放されたが帰国し、次の監督は精神を病んで任務を解かれた。反政府蜂起が起きた頃には建設現場でもサボタージュや放火があった。ヴァーグナーは自分が問題解決の手腕を買われて抜擢されたことを自覚していたが、初日から不運に見舞われる。出勤の途中、地元のインディオたちによってインカの蛇として神聖視されているアカライ蛇を車で轢き殺してしまう。言い伝えによると、この蛇を殺した者はいずれ溺死する運命にあるという。この件はすぐに現場の労働者たちの間に広まり、以来インディオの労働者たちはヴァーグナーをそれとなく避けるようになる。彼が何らかの厄災をもたらすと思われたのだ。

また現場には技術的に重大な問題があった。まず工場用地が計画とは違って、いずれ地下水の噴出によって沼地になる土地であることが判明する。こ

のままだと5年後には工場が沼地に埋没する。また建設中の支柱には鉄筋が不足していた。しかもセメント工場から運ばれてくるコンクリート材の質が劣悪で、このままだと建物倒壊の可能性があった。ヴァーグナーは改善に奔走するが、彼の打ち出す対策はドイツ人スタッフとの軋轢を生む。事物の論理に従うべきとするヴァーグナーに対し、私生活での失敗者で冷笑的なシュタインホルストは変化を嫌って現状維持を望み、柔和なハルトマンは周囲との摩擦を最小限に押さえようとする。ブレドウの関心事は専ら経費の問題だった。さらにインディオの労働者たちとの関係も悪化する。ヴァーグナーが神聖な蛇を殺してしまったことに加え、ボリビア人インディオの労働者が不法就労発覚のために強制送還されたり、ヴァーグナーが善意から労働者たちの衛生や食事に関与したことが彼らの感情を傷つけ、彼らがストライキに入ってしまう。しかしインディオたちは結局ヴァーグナーの謝罪を受け入れて仕事に戻り、コンクリート材の質も改善されて事態は好転するかに見えた。ところが軍がやってきて4名のインディオたちを労働争議扇動の嫌で逮捕してしまう。前回の反政府暴動が起きて以来、町は未だに戒厳令下にあった。軍は労働者ストライキを蜂起の前兆として何よりも恐れており、ストに繋がるどんな小さな試みも容赦しなかった。労働者の喪失は監督としてのヴァーグナーの失敗であり、工事の進捗にとっても大きな痛手であった。本来インディオの労働者たちを軍の関与から護りたいと考えていたヴァーグナーは、良心の仮借に苦しめられることになる。

6. “異国の乙女、あとかたもなくかき消えぬ”²²

スペイン語能力の必要性を痛感したヴァーグナーはスペイン語の家庭教師を雇うが、通訳のフアンで紹介でやってきたのは、地元和学校教師を政治的な理由でクビになったというスペイン系の若い女性、ルイーザであった。異文化と接する場合、異性は最良の仲介役となり得るが、ルイーザは仲介役というよりむしろ、ヴァーグナーに自らが抱える内面的不安定さを自覚させる

役割を果たす。ヴァーグナーは自分でも驚くほど即座に南米行きの任務を引き受けたが、その理由について長く考えを巡らしていた。確かに建築技師として外国で大きなプロジェクトを率いてみたいという野心があった。成功している同僚と肩を並べたかった。また、いわゆる“第三世界”に赴いて現地での技術躍進に貢献したいという願望もあった。しかし次第にはっきりと自覚されるのは、妻との感情的な絆が減退して——妻も夫の海外赴任をあっさりと受け入れる——夫婦関係が停滞していることと、規則的だが味気ない日常生活からの逃避願望だった。家庭において自分が余剰物であるかのように感じていたヴァーグナーは、自分の存在がかけがえのないものであると思えるような体験を欲していた。同時に自分の中から願望というものが「慣習や小さな必要事に追いやられて失われてしまった」(247)という思いも抱いていた。特にルイーザと出会って以来、自分の喪失感がはっきりと自覚されるようになる。純真さと確固とした自意識が共存するルイーザに惹かれ、人生の刷新の必要性を感じた彼は、ルイーザとの同棲を考えるようになる。ところが初めて彼女と一夜を共にした翌日、彼女が失踪してしまう。実はルイーザはゲリラとの関連を噂されており、ヴァーグナーは周囲から彼女と関わらぬよう忠告を受けていた。最初は気にとめなかった彼だが、いざ彼女が失踪してしまうと、最初の建築主任の誘拐にも彼女が関わっていたのではという疑念を抱くようになる。その主任が拘束されていたアパートの描写とルイーザの部屋には一致点があった。この町の者ではない彼女を知る人は少なく、彼女の行方を知る術もない。ヴァーグナーは老成した若者、ハルトマンに助言を求める。

7. 開発援助の闇の奥

ハルトマンは南米での任期を終えて帰国しようとしていた。ヴァーグナーとハルトマンは自ずと文化の相違について意見を交わすことになる。ハルトマンはインディオの文化に深い関心を持ちながらも、彼らには関与しないと

いう静観主義の持ち主だった。進歩でも文明でも外からやってきて人に押しつけることはできない、と彼は主張する。「事物にそれ自体とは異質な論理を押しつけることはできない。人間ならなおさらだ。押しつけは暴行のようなものだ。事物が壊れてしまうように、人間だって壊れてしまう。」(208)それに対し、進歩主義者のヴァーグナーは、論理というものは自ずと貫徹されるものだとは応じる。彼は人間の願望には普遍性があると考えている。「耕耘機を一度見てしまったら、誰も鋤で地面を耕したいと思わない。」(208)しかしハルトマンは、自分の考えには普遍性があるって規範的であるとする人たちを嘲笑する。

「確かにドイツでは多くの人がそう考えている。いつも進むべき道を知っているつもりでいる人たちだ。最初彼らは何が人間の益になるかを知っていた。つまり進歩と文明だ。今は何が益にならないかを知っている。つまり進歩と文明だ。昨日彼らはコルビュジエの高層建築を建てたがらない人々のことを笑っていた。今日はそういう建物を建てたがる人々のことを笑っている。彼らは永遠の小利口者さ、たとえば自分たちを西洋中心主義者といって自己批判するとしてもね。」(208)

技術の信奉者であるヴァーグナーは、学問的な議論をしている間に人が飢えていく、と反論する。人が飢えないためには工業化するしかない。「しかもこれは国の委託による仕事なのだ。」(209)ハルトマンは次のように応じる。

「だからなおさらさ。全ての負担を背負うのはこの国の人たちなんだ。我々は借款を与え、工場を建てて機械を導入し、原始林を伐採して自分たちの尻を拭くための紙を作る。後に残されるのは赤茶けた荒れ地と使い物にならない製紙工場、それに借金だ。(…)僕は工場が沼に沈めばいいと思っている。しかも早ければ早いほどいい。」(209)

この対話により、ヴァーグナーの内面で変化が始まるのは確かである。二人は「沈みゆく船」(210)に乾杯して別れる。

冷静な部下によって目を開かれるというのは、『モレンガ』と共通した人間関係上の構造である。『モレンガ』においても、主人公のゴットシャルクは部下のヴェンストゥループの影響によって植民地戦争の不正義を認識するに至る。同様にヴァーグナーも、ハルトマンの与える刺激によって様々な現象の関連性を見る必要性に気づき始める。工事現場と予定地が一致しないのはなぜなのか。土地買収に不正があったのか。土地の所有者であるコンソーシアムの正体は？なぜコンクリート材は国の品質保証書通りではないのか。会社はこの工事を受注するために多くの賄賂を支払っている。工事の欠陥すべてを修復する資金は残っているのか。資金面で妥協すれば船は沈んでしまう。かつてヴァーグナーは、自分は依頼された建物を建てるだけの“下働き”だと考えていた。しかしハルトマンは建物の目的を考えるべきだと言う。彼のように考えて関与を縮減しても船は沈む。しかしみすみす建設に失敗して自らのキャリアを終わらせて良いのか。建設の失敗を見過ごす行為は、「自分の仕事を裏切るようなもの、破滅的な自己嫌悪」(164)だと思われた。彼は“考え直さねば”と何度も自分に言い聞かせる。アウトサイダーの部下ならば、職場を離脱して自分の思想的貫徹を図ることができる。しかし自らの欲するところは何なのか、ヴァーグナーは模索する。最初の現場監督を誘拐したゲリラたちはなぜこのプロジェクトに反対していたのだろう。そしてルイーザは誘拐に関与していたのか。疑念を抱く一方でルイーザを取り戻したいヴァーグナーは、彼女に関する何らかの情報を求めて首都まで出かけて行く。そしてその際“汚い戦争”の現実を垣間見ることになる。

8. 失踪しかかるヴァーグナー

首都に出たヴァーグナーは行政官庁を訪れるが、ルイーザに関する手がかりは何も得られない。官吏の話によると、地方では軍の最下層部でさえ独自

に行動するため、誰の身に何が起きても何も記録に残らない。しかも、「長髪で髭面の者、眼鏡をかけていて30歳以下の者、ジーンズを履いて本を読んでいる者なら誰でも」(224) 反政府派と見なされて連行される恐れがある。ルーザーはカルペンティエルを読んでいた。

官庁の中庭に見慣れぬ高木を見たヴァーグナーは、官吏にその樹の名前を尋ねる。作品のタイトルである「蛇の樹」²³である。それは170年前にこの国の独立を記念して植樹されたものだが、官庁の裏が拘置所だったため、囚人が二度と拘置所から出て来ないとしたら、その樹に住んでいるという蛇に咬まれたせいだという迷信が形成され、今でも信じられているという。迷信の根絶と称して軍がその樹を伐採しようとしているが、本当は樹が行方不明者の象徴になってしまうことを恐れているらしい。ドイツで情報学を修めたというその若い官吏は、「すべてが滑稽で浅はかな話だ」(225) と一笑するが、ヴァーグナーにはその樹の枝が投げる陰が拡がる黒雲のように見える。結局ルーザーの手がかりは何もつかめず、首都への旅は徒労に終わった。

帰路の途中で道に迷って逡巡するヴァーグナーは車の部品と鞆を盗まれ、路線バスとロバを乗り継いで帰宅する羽目になる。ロバに乗って森の中を行く途中で、大胆な弧を描くコンクリートの建築物が突然頭上に現れて驚嘆する。ハルトマンの話にあったサン・イシドロの高速道路橋である。それは6車線の高速道路から成る地上150メートルの橋梁で、進入路がないために無用の長物となって森の中に放置されていた。元は近隣の錫鉱山と当時の大統領の郷里の村を結ぶために計画された、ドイツとフランスの借款による建設プロジェクトだった。ところが錫鉱山は採算が悪化して閉鎖され、大統領もクーデターで失脚したために建設が中止され、橋梁部分のみが残されたのである。その見事な橋はヴァーグナーが信じるころの、技術による「事物の実現可能性」(152)を示すものではあったが、同時にハルトマンの言う「汚職と杜撰な計画の記念碑」(253)でもあった。

森を出た後はバスで帰宅する予定のヴァーグナーだったが、途中の宿で睡眠中にいきなり部屋に踏み込んで来た兵士たちに連行され、秘密収容所に収

容されてしまう。恐らくゲリラのシンパと思われたのだらうが、身分証を失った彼は身元を証明できないまま拷問部屋で屈辱的な扱いを受け、独房に放り込まれる。独房で彼は殺害されるかも知れないという恐怖と闘う。その秘密収容所では連行されたと思われる多くの男女の姿も見た。結局ブレドウと連絡が取れて嫌疑が晴れ、自宅に搬送されて事なきを得るが、リュッツェラーの解釈によると、ヴァーグナーはこの恐怖の体験により、日頃見慣れた知覚可能な世界が部分的に関係性を失うという非相同性^{ヘテロロギエ}を体験する²⁴。世界は自分が考えたような方法で成立しているのではないのだ。この遠出の間に起きた一連の体験により、彼の内面で起きていた変化がさらに大きなものになる。

9. 抵抗の前兆

ヴァーグナーはこの国に来て以来、時々熱と悪寒に襲われていた。自分では流感に罹ったと思っていたが、彼の様子を見たブレドウは、ちょうど風邪のような症状で始まって次第に悪化する奇妙な病気に言及する。欧米人のみが罹患し、しばしば死に至るので「アタワルパの復讐」(270)と呼ばれている深刻な病気である。しかし医者に行くように言われても、病気休暇を取って帰国するつもりなどないヴァーグナーは耳を貸さない。

留守にしていた間に“緑の丘”では変化が起きていた。丘と周囲を隔てる壁が高く補修され、有刺鉄線が張り巡らされた。ヴァーグナーの隣家は丘の上方へ越して行き、彼も安全な場所に越すよう会社から勧告される。壁の外側の不穏な雰囲気には、ヴァーグナーも以前から気づいていた。壁の外の小屋が日毎に壁側に近づいていたし、夜になると時々爆発音や銃声が聞こえ、壁沿いに潜んで何かの作業をする人影も見えた。何かが起こりつつあった。

そして職場では、ヴァーグナーの留守の間に通訳のファンが失踪していた。タバコを買いに出て拉致されたらしい。ルイーザとファンの失踪には関連があるとヴァーグナーは確信する。そしてファンと十分に語り合わなかったことを激しく後悔した。工事現場では、以前ヴァーグナーの抗議によって改善

されていたコンクリート材が再び劣悪な状態に戻っていた。しかしヴァーグナーはそのコンクリート材の使用を許可する。つまり自ら船を沈めるための決定を下したのだった。建築事務所の床は既に傾斜していた。ヴァーグナーは「破滅に向かう密かな意欲」(289)を感じていた。「その破滅はすでに全てのものを巻き込んでいた。否、それどころかすでに建設そのものの中に潜んでいたものだった。」(289)彼は物事の進展に身を任せる決意をしたのだ。そしてその日、激しい豪雨が襲来する。土地も道路も見える間に冠水していく。

洪水がやってくると同時に、町では複数の工場のストライキや警察への襲撃が起きていた。多くの兵士が動員され、まさに戒厳令下の状態となった。ブレドウ家にセメント会社の重役やクラマー大佐が集まる。ヴァーグナーはそこで自分に賄賂が支払われる手筈であることを知る。質の悪いコンクリート材を許可した報酬だ。彼はそれと知らぬうちに贈賄で私服を肥やす一味に荷担したのだった。彼は悪寒に襲われ、町は停電する。首都ではゲリラがラジオ局を占拠したとか、革命が始まるという噂が流れる。外では銃声や爆発音がして戦車が出動し、遠くから火の手が上がっていた。“緑の丘”の外側はすっかり冠水しており、帰宅したヴァーグナーは庭の暗闇に多くの人影を見る。恐らく水害を避けるために壁を超えて侵入した人々だ。ヴァーグナーはその中に連行されて行った自分の労働者たちの姿を見る思いがし、「彼らになら手を貸せる、彼らになら壁を越えられるよう手助けをしてもいい」(298)と考える。彼は怒りと失望と喜びが入り交じった感情に襲われていた。熱と悪寒を感じながらしばらく暗闇の中で銃声を聞く。銃声が止んだら雨音のみが聞こえる。それは「まるで世界が息を潜めているかのようだった。」(299)

作品はこの文章で終わっており、多くの疑問が残されたままとなる。ヴァーグナーは果たして「アタワルパの復讐」に襲われたのか、民衆蜂起が起きたらヴァーグナーはどう行動するのか。これらの問いは開かれたままであり、すべてが読者の想像に委ねられる。

10. (ポスト／ネオ) コロニアル社会としてのアルゼンチン

『蛇の樹』はアルゼンチンを舞台とした小説でありながら、現地人の登場人物たちの台詞が少ない。ヴァーグナーが日常で直接言葉を交わす現地人は通訳のフアンと家庭教師のルイーザであるが、二人とも彼がよく知り合いたいと望んだ矢先に失踪してしまう。『モレンガ』の場合と同様、『蛇の樹』においても他者はあまり声を持つことはない。物語は筋に不在の中立な語り手によってヴァーグナーの視点から語られており、このことを西欧のパースペクティブの支配、主人公に対抗する現地の声の欠如として批判する研究もある²⁵。しかしティムのポストコロニアル文学における他者の声の背景には、他者の主体としての声を創造して語らせることは不誠実な行為²⁶であるというティムの考えがある。『モレンガ』について、他者の声を創造するという「感情移入の美学自体がコロニアルな行為だ」²⁷と彼は語っている。他者の声を聞こえるものにする試みが、「白人が自己投影をするための見えない鏡」²⁸となってしまうのは、実はポストコロニアル文学における「袋小路」²⁹なのである。しかしこの小説の場合、現地の声の欠如が声なき大衆という原住民の位置を際立たせていると考えるべきであろう³⁰。特にインディオの労働者たちは彼らの代表者と通訳を通じてヴァーグナーと交渉するため、全く声を持つことはない。自ずと声と力の偏在について考えなければならない。するとこの国の(ポスト／ネオ)コロニアルな状況が層を成して見えてくるはずだ。その状況は以下の3つの相のもとに整理することができる。

1) 移民政策と従属的文化

プールのある大邸宅に家政婦を置いて住むヴァーグナーの暮らしぶりは、まるで植民地官吏のそれのようである³¹。また周辺には、“緑の丘”にせよ、高級バーやスポーツクラブにせよ、多くの外国人たちがいる。彼らは開発援助によって潤う辺境の地にビジネスチャンスを求めてやってくるヨーロッパ人であり、ブラジル人、ヴェトナム人、軍事顧問としてのアメリカ人たちで

ある。しかし作品の中で特に大きな存在感を持つのは、ドイツ人コロニーのドイツ人たちだ。彼らはヴィルヘルム時代の語彙とズッターリン筆記体を使って生活し、庭には樅の木を植えて小人の置物を置く。ドイツ本国の人間にこの話をしても「誰も信じないだろう」(77)とヴァーグナーは考えるが、この意外なコミュニティ像の背景には、アルゼンチンにおけるドイツ系移民の現実の存在がある。彼らの多くは他のヨーロッパ系移民と同様に19世紀に南米に移民してきた。ヨーロッパ系の中でも特にドイツ系住民たちは能率、秩序、組織力といった素質を生かし、多くが経済的、社会的、政治的に重要な地位に着いていると言われている。作品においても地元の人間たちはドイツ人に対する賞賛を口にする。

中南米で半生を過ごしたというM・ラルは、『蛇の樹』のテーマはドイツ人コロニーであると考えてる一人である³²。「ラテンアメリカ大陸全体が、ドイツが“太陽の下に国土を”という植民地の夢を見るずっと前に独立していたのだ。なのにドイツ人たちがラテンアメリカの多くの都市で自らを“ドイツ人コロニー”と呼ぶのはおかしいことだ。まるでその土地を植民地化するために来たかのように」³³、と彼女が語るのには興味深い。ドイツが実際に入植植民地を所有したのはアフリカであったが、ドイツ人による植民地のイメージ形成について研究しているS・ザントップによると、18世紀末からドイツにとって植民地願望の大切な投影先だったのはアフリカではなくて南米であった³⁴。

仮に南米移民としての個々のドイツ人には上述のラルが言うような植民地化の意識がなかったにせよ、アルゼンチンにおける19世紀半ばからの政策は人種の観点による欧化主義であり、それによって先住民やその文化、スペイン的伝統といった要素が排除され、ヨーロッパ近代を範とする従属的な文化³⁵が誕生することになった。しかも20世紀初頭には先住民を劣等人種で消滅すべき運命にあるとする人種論者が影響力を持ち³⁶、移民による白人化によって国民の人種的変革とメンタリティの改革を目指す発想が支配的となる。これはドイツ帝国が19世紀末に南西アフリカを領有し、人種主義による

圧政を行った際の思想と同質のものだ。つまりアルゼンチンの先住民たちは、国が1816年にスペインから独立した後も、新たな移民政策によってさらなる植民地化を被ったことになる。インディオやガウチョはパンパを追われ、都市からは黒人が姿を消した。1930年代後半にはイタリア系住民が国民の4割を占めるようになったが、移民の中にはドイツ系も多く、ドイツ語話者という範疇で見ればその時代の移民の約4分の3がヴォルガ・ドイツ人を含むドイツ語話者だったと言う³⁷。文化のヨーロッパ化というこの強制的で非大衆的な支配的政策は、国から創造的エネルギーを奪い、主権国家として発展する能力を損なったと、今日では民族主義者から非難されていると言う³⁸。

作者のティムが支配的なヨーロッパ文化の象徴の一つとして使用しているのが、キリスト教的言説と宣教師の像である。ヴァーグナーは家政婦のゾフィーや、首都からの帰路において出会うドイツ人家庭の家長から終末論的説教を聞かされて辟易する。しかも、物語の終盤で彼も破滅に向かっていくかのような気分になることから、宗教的言説が否応ない影響力を持つものとして描かれている。また、インディオであるフアンの中から、時折キリスト教宣教師に対する反感が聞かれることも見逃すことができない。ある日彼は、ヨーロッパからの宣教師と遭遇した後に、抵抗の手段として子孫を残さないことを決意したあるインディオの部族の話をする。また、開発援助の功罪についてヴァーグナーとハルトマンが語り合っていた時、自分の郷里のグランチャコ地方に住むメノナイト派の宣教師について次のような話を始める。「僕らの部族が住んでいるヤカレ河畔では、上流に一人の宣教師が住んでいる。そして下流にも一人の宣教師が住んでいる。僕等の族長はいつも言ってる、二人分だけ多すぎるってね。」(129)自分たちは宣教師ではないと言うヴァーグナーに対し、彼は続けて言う。「同じ事さ。君たちエンジニアは宣教師だよ。そして君たちの方が強力な宣教師さ、つまり普通の宣教師たちは奇跡について話すだけなのに、君たちは奇跡を起こすんだからね。」(129)実際には宣教師の恩恵を受けたフアンではあるが、彼の頭の中にはかつて宣教師がいなかったインディオの世界が存在し、その後二種類の宣教師と遭遇する歴史が

意識されていることが分かる。つまり、読者はここに二重のコロニアルな構造を見ることになる。スペイン系の西洋人に植民化された南米、そして独立した政府の移民政策によって改めてヨーロッパに対しての従属的文化におとしめられた南米である。アルゼンチンのポストコロニアルは、実は未だにコロニアルなのである。

2) 軍政とドイツの関係

ドイツ系住民たちが影響力を持っていたのは政治や経済の分野だけではなかった。彼らは軍隊との深い結びつきを持っていた。M・バー＝ゾウハーによると、ドイツ人社会が南米のほぼ全域の政治に決定的影響を与えていたのは、ドイツ帝国の軍事使節団によって訓練された軍隊を通してだった³⁹。使節団の中には後にナチスの要人になった人物もいる。第三帝国の首脳部は、1933年に政権を握った当初からナチズムを南米諸国に伝播するために努力を払ってきたと言われている。そして閉鎖的な狭いドイツ的世界で育った南米のドイツ系移民の存在は、南米諸国でナチスが大規模な運動を展開するのを助けた⁴⁰。しかも第二次世界大戦後、戦前からナチスの崇拝者でナチスの関係者から金銭的援助も受けていたと言われる⁴¹陸軍大佐のJ・D・ペロンが政権を執ると、ナチスと政権との結びつきはさらに強まる。ペロンはドイツ系とイタリア系移民の力を借りて軍を近代化し、国を工業化するための5カ年計画を立てる。移民の過去の党籍など問われなかった⁴²。その際アイヒマンに代表されるナチスの有力メンバーの多くがアルゼンチンに移住したのはよく知られている事実だ。

『蛇の樹』ではドイツ人コロニーの元親衛隊大佐クラージェスについて、ヴァティカンの関与によってアルゼンチンに入国したこと、また秘密裏に移送されたドイツの国家資金を秘匿していることなどが噂される。読者はアイヒマンのような人物が現在もアルゼンチンにおり、それがドイツ人コロニーの現実であることを想像することになる。クラージェスがヴァーグナーに父親の戦績について尋ねる場面は、ヴァーグナーもドイツ系二世のクラーマー大佐と

同様にナチスから数えて二世代目であり、彼らが皆同じ歴史を共有している事実を思い起こさせる。ペロンと同じく軍の大佐であるクラマーは、この国で「ヨーロッパ並の水準で機能しているのは軍隊だけだ」(91)と自慢するが、ヨーロッパ並ということはこの場合ドイツ的ということであり、その軍隊が多くの市民を誘拐し殺害する⁴³「汚い戦争」を行っているのである。他にもドイツ連邦刑事局で研修を行ったという情報局の高官の存在など、この政権とドイツとの関係の深さは注意に値する⁴⁴。しかも、軍部が市民の抑圧を行っているのは隣国のパラグアイも同様である。ティムは『蛇の樹』出版の翌年にストロエスネル大統領の人権弾圧を告発する「パラグアイへの旅」⁴⁵というエッセイを発表しているが、そのドイツ系のストロエスネル政権から逃れて来たファンは、南米の「独裁者はどこでも至極似通ってるよ」(71)と自ら語った通り、結局アルゼンチンでも軍の弾圧を免れることはできなかった。ファンとルイーザの連行がクラマーの部下によって行われたことは作品の細部が暗示しており、大切な二人の人間を失ったヴァーグナーがクラマー大佐に抱く敵意は容易に理解できるが、主人公の感情は、子供の頃から全体主義の名残を忌み嫌っていたティムの感性を反映していると思われる。軍部が直接政権を執って社会の政治的安定を強行に確立しようとする全体主義的政治に、ティムがドイツの全体主義との相同性を見ていることは、明示されないアルゼンチンという国名と共に、明言はされないが作品に通底する感情の一つである。

3) 開発援助によるネオコロニアリズム

ティムはインタヴューやエッセイ、講演などによって自分の作品について比較的多くを語る作家である。『蛇の樹』についても同様で、作品成立の背景について多くのことが語られている⁴⁶。例えば、主人公のヴァーグナーに実在のモデルがいたことである。それはティムがある時アルゼンチンの地方都市のバーで出会ったドイツ人の建築技師で、彼が国の北部に建設した製紙工場は汚職の結果として沼地に埋没してしまい、彼が恋をしていたスペイン語教

師は失踪してしまったと言う。クーデターによってイザベル・ペロンを追放して大統領となり、後に人道に対する罪のために終身刑の判決を受けたJ・R・ヴィデラの時代だった⁴⁷。

そもそもティムはアルゼンチンをよく知る人物である。学生時代に結婚した彼の妻は150年前にアルゼンチンに移住したドイツ系移民の子孫で、ドイツ人コロニー育ちでもあった。ティムはしばしば家族連れでアルゼンチンに帰省し、そこでの暮らしを体験している。しかし上記の技師に出会うまで、ティムは南米を舞台にした小説を書くつもりはなかった⁴⁸。が、この人物の話はその時ティムの頭にあった二つの事柄と深く関わっていた。技術進歩主義と開発援助である。当時のティムは、現代の科学技術が人間の生活を利するよりもむしろ環境破壊や原発事故等の破滅を引き起こすのではという懸念を抱いており⁴⁹、また世界各地で開発援助がもたらす損害や不正を見て、援助のオルタナティブなかたちの可能性について思案していた。この二つを巡る想念がバーで会ったドイツ人技師という恰好の主人公を得て、物語というかたちを取って熟成されていった⁵⁰。

ヴァーグナーは製紙工場プロジェクトの多くの問題を見て、「気が変にならない方がおかしい」(164)とは思っても、ハルトマンと出会うまで開発援助に関して深い考えを持たなかった。が、次第に様々な現象の関連性が見えるようになると、製紙工場も高速道路橋も人々に利益をもたらさず、むしろ環境破壊をもたらし、社会のごく一部を潤すだけだと気づく。ルイーザの台詞通り、この町の人間はヴァーグナーのように仕事帰りにテニスなど出来ない。現場の現地人スタッフが時々欠勤するのは、副業を持たねば食べていけないからであり、現場の底辺にいるインディオの労働者たちの住環境は劣悪である。彼らがストライキを始めた時、ヴァーグナーは、「惨めな宿舎、安い賃金で、家族や仲間たちを離れ、全てを甘受して」働く彼らには「もっとずっと前からストをする十分な理由があったはずだ」(173)と考える。他方では、ヴァーグナーの会社が賄賂を払ってこの国で多くのプロジェクトを請け負い、利益を上げている。裕福なドイツ貴族のブレドウやセメント会社の重役

は経費の一部を着服して私腹を肥やす。国は何十年もかけて全てを返済しなければならない。すでに文化的に従属的なアルゼンチンは、この歪な開発援助によって経済的にも従属的状况に置かれ、国が自立的に発展を遂げる道を閉ざれる⁵¹。先進国が後進国を抑圧的に経済利用するという意味において、開発援助は巧妙で陰湿な形態の植民地主義である⁵²。

『蛇の樹』をポストコロニアル文学であるとする多くの評論は、この開発援助に関わる局面のみを捉えて主張を展開しているが、筆者の考えではコロンIALの状況は上記のように多層的である。M・ヒールシャーは2005年の評論の中で、発表から20年を経てこの作品を読むと、そのポストコロニアルな局面が以前にも増して明確に把握できるようになり、このテキストが持つ炯眼が際だつ、と述べている⁵³。それはアッシュクロフト他の理論書が述べているように、コロンIALという現象に「一貫して同じ性質の問題が」この20年間「認められる」⁵⁴からだとしたらなおのこと、ポスト、ネオ等の用語には二義的な重要性しかないのであり、あるのは不当な支配と抑圧の緊張関係である。我々が行うのは目を凝らしてそれを注視することである。

11. 失敗の功績

インターカルチュラル文学としてこの作品に注目するなら、すぐ念頭に浮かぶ象はライトモチーフとしての「蛇」である。蛇は主人公がアルゼンチンの文化や事象、人々と接する4つの場合に登場し、それぞれが象徴的に働いている。まずはヴァーグナーが神聖視されているアカライ蛇を轢き殺す場面である。蛇は理解が困難な異文化の象徴である。ヴァーグナーはタブーの侵犯によって周囲から社会的な罰を受け、制裁を解かれるためには率直な謝意を表明するしかない。

作品のタイトルである「蛇の樹」は、象徴として作品中最も重要である。この樹が本来独立の記念として植えられ、後に拘置所から帰れぬ人々を、また現在では失踪した人々を想起させるという事実から、作品全体に冠せられ

た名辞としての「蛇の樹」は、国が主権国家になってもその運営が難航し、政権によって幸福な暮らしを奪われる人々の艱難を象徴していると言えよう。リュッツェラーの考えでは、この作品のテーマは「汚い戦争」における人間の失踪であり、作者はヴィデラ政権時に行われた非人道的な人権侵害を告発していることになる⁵⁵が、筆者の考えでは、作品は「汚い戦争」の犠牲者のみならずインディオの労働者などを含めて、政権が人々に困難な生活を強いることの不当性を告発していると考えられる。

また、ヴァーグナーが首都からの帰路に迷って迷走する途上で、毒蛇に咬まれて指を切り落とした男に出会うバナナ園での情景がある。この男は指を蛇に咬まれた後すぐさま医学的に正しい処置をし、病院へ向かうヴァーグナーの車中では落ち着いて弱々しい笑顔さえ見せる。病院での治療までの挿話状況には迷信など介在しない現代医学の論理、ヴァーグナーが信じる「事物の実現可能性」の論理があるのみであり、このヴァーグナーの介助によって、彼のタブー侵犯の禍々しさが中和されてゆく過程が見て取れる。

最後に、ヴァーグナーがロバの背に乗って森の中に行く場面にアカライ蛇が登場する。ロバ使いの親方が歩を止めて蛇をやり過ごす様子をヴァーグナーが見つめる情景に、蛇にまつわる文化的な学習の過程が表現されていると言えよう。

また、主人公の他に3人のドイツ人が登場するのも、インターカルチュラル文学として読むこの作品の面白さの一つである。アルゼンチンに長く住むブレドウはこの社会の成功者であり、軍や省庁と良い関係を築き、時には自分の利益のためにそれを利用する。挫折感の持ち主であるシュタインホルストは不正や間違いを看過し、自分の安全な居場所を確保している。しかしブレドウについてヴァーグナーに「気をつけろ、やつらはハイエナだ」(136)と忠告するなど、自分の良心の境界は守っている。若いが慧眼の持ち主であるハルトマンは仲裁者の役柄だが、物事に関与し過ぎないよう場所移動を繰り返すタイプである。異国で働くドイツ人はそれぞれの人物の様々な側面に自己投影できるだろうと思わせるものがある。主人公のヴァーグナーは政治

的に最もナイーブで、最終的には業績の面でも私生活の上でも失敗者となる。他の誰でもなく最後に暗闇の中に立ち尽くすヴァーグナーが主人公であることによって、作品によって「読者に沢山の問いをかける」⁵⁶とティムが意図した通り、読者には沢山の問いが残され、読者自身が追体験による自己定義を行うことになる。ティムの作品の主人公の行動について総じて指摘される「失敗の功績」⁵⁷が、ここでも発揮されている。ポストコロニアル文学という概念が広まった時、セミナーや会議の参加者たちが競うようにしてこの作品を読んだという逸話⁵⁸も、頷ける話である。

以上見てきたように、ホーフマンの理論にある通り、他者との関係性に関するポストコロニアルな力関係の文脈上にドイツ人の自己定義を読むことができるという意味において、『蛇の樹』は興味深い小説である。

また、作品の美学的な特徴については詳述することができなかったが、物語は細部が緊密に構成されており、重く陰鬱な内容でありながら冒険物語のような緊迫感を味わいつつ読み進めることが出来る。昨今のドイツ文学界においては貴重な語りの名手⁵⁹と言われるティムの、面目躍如たる作品である。

注

- 1 Uwe Timm: Morenga. Köln: Kiepenhauer & Witsch Verlag. 1978.
- 2 Timm: Der Schlangenbaum. Köln: Kiepenhauer & Witsch Verlag. 1986. (引用・参照に際しては本文にカッコ付きでページ数を表記する。)
- 3 Timm: Kopfjäger. Köln: Kiepenhauer & Witsch Verlag. 1992.
- 4 副島美由紀「ドイツ植民地に関するポストコロニアルなブレイクホロコースト小説：ウーヴェ・ティムの『モレンガ』論」In：小樽商科大学「人文研究」第118輯 2009, S. 143-190.
- 5 Axel Dunker: Einleitung. In: Ders. (Hg.): (Post-) Kolonialismus und Deutsche Literatur. Bielefeld 2005, S. 13.
- 6 Paul Michael Lützeler: Einleitung: Postkolonialer Diskurs und deutsche Literatur. In: Ders. (Hg.): Schriftsteller und "Dritte Welt". Tübingen 1998, S. 25ff; Ders.: Postmoderne und postkoloniale deutschsprachige Literatur. Bielefeld 2009, S. 96.
- 7 例えば Giselher W. Hoffmann のようなナミビアにおけるドイツ系作家によるいわゆる「クレオール」の文学は確かに存在するが、ポストコロニアル文学に

- ついて “the Empire writes back to the Centre.” という表現で言い表されるような、本国に影響をもたらす状況までには至っていない。
- 8 Herbert Uerlings: Kolonialer Diskurs und deutsche Literatur. In: Axel Dunker (Hg.): (Post-)Kolonialismus und Deutsche Literatur, S.39ff.; Axel Dunker: Einleitung. In: Ders. (Hg.): (Post-) Kolonialismus und Deutsche Literatur, S. 13.
 - 9 Uerlings: Kolonialer Diskurs und deutsche Literatur, S. 41.
 - 10 Norbert Mecklenburg: Das Mädchen aus der Fremde. Germanistik als interkulturelle Literaturwissenschaft. München 2008, S. 13.
 - 11 Uerlings: Kolonialer Diskurs und deutsche Literatur, S. 43.
 - 12 Michael Hofmann: Interkulturelle Literaturwissenschaft. Paderborn 2006, S. 7.
 - 13 Andrea Leskovec: Einführung in die interkulturelle Literaturwissenschaft. Darmstadt 2011, S. 33.
 - 14 Ibid., S. 23.
 - 15 Hofmann: Interkulturelle Literaturwissenschaft, S. 8.
 - 16 Ibid., S. 8.
 - 17 Vgl. Simplicio Agossavi: Fremdhermeneutik in der zeitgenössischen deutschen Literatur. St. Ingbert 2003.
 - 18 Vgl. Dietrich Krusche, Alois Wierlacher (Hg.): Hermeneutik der Fremde. München 1990.
 - 19 Vgl. Alois Wierlacher: Mit fremden Augen oder Fremdheit als Ferment. Überlegungen zur Begründung einer interkulturellen Hermeneutik deutscher Literatur (1983). In: Krusche, Wierlacher (Hg.): Hermeneutik der Fremde.
 - 20 Vgl. Simplicio Agossavi: Fremdhermeneutik in der zeitgenössischen deutschen Literatur; Michael Hofmann: Interkulturelle Literaturwissenschaft; Björn Hochmann: Zum Umgang mit kultureller Alterität in postkolonialen Gesellschaften am Beispiel von Uwe Timms Roman “Der Schlangenbaum”. München 2008.
 - 21 Hofmann: Interkulturelle Literaturwissenschaft, S. 52.
 - 22 シラーの詩 “Das Mädchen aus der Fremde” より。Friedrich Schiller: Sämtliche Werke, Berliner Ausgabe, Bd. 1. Berlin 1980, S. 408f. 参照：『シルレル詩全集』大野敏英・石中象治訳（白水社）1943, 22 頁。
 - 23 チリ原産のナンヨウスギ科の樹木で、樹高は 20 メートルにもなると言われている。和名はチリ松、英語圏では monkey puzzle tree と呼ばれる。
 - 24 Paul Michael Lützel: Bürgerkrieg global. Menschenrechtsethos und deutschsprachiger Gegenwartsroman. München 2009, S. 283.
 - 25 Nilüfer Kuruyazici, Unterschiedliche Lesemöglichkeiten von Uwe Timms Roman „Der Schlangenbaum“. In: Bernd Balzer (Hg.): Annäherungen: polnische, deutsche und internationale Germanistik. Wrocław 2003, S. 496.
 - 26 Christof Hamann/Uwe Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt“: Ein Gespräch. In: Sprache im technischen Zeitalter, Vol. 168. 2003, S. 452f.
 - 27 Ibid., S. 452.

- 28 Uerlings: Kolonialer Diskurs und deutsche Literatur, S. 42.
- 29 Ibid., S. 42.
- 30 Berna Ercan / Axel Schalk: Von A-pokalypse bis Z-erfall. *Der Schlangenberg*—Uwe Timms politischer Roman. In: Frank Finlay/Ingo Cornils (Hg.): „(Un-)erfüllte Wirklichkeit“. Neue Studien zu Uwe Timms Werk. Würzburg 2006, S. 117.
- 31 Keith Bullivant: Reisen, Entdecken, Utopien: Zum Werk Uwe Timms. In: Deutsche Bücher, 25 Heft 4, 1995, S. 257.
- 32 Marlene Rall: Interkulturelle Dialoge. Uwe Timm: “Reise nach Paraguay” und *Der Schlangenberg*. In: Paul Michael Lützeler (Hg.): Schriftsteller und “Dritte Welt”. Tübingen 1998, S. 164.
- 33 Ibid., S. 156.
- 34 Susanne M. Zantop: Kolonialphantasien im vorkolonialen Deutschland (1770–1870). Berlin 1999, S. 21ff.
- 35 松下マルタ「アルゼンチン文化の諸相」In: 中川文雄・三田千代子編『ラテンアメリカ 人と社会』（新評論） 1995, 87 頁。
- 36 同上, 88 頁。
- 37 Gerald Steinacher: Nazis auf der Flucht. Frankfurt a. M. 2010, S. 236.
- 38 松下マルタ「アルゼンチン文化の諸相」, 87 頁。
- 39 マイケル・バー＝ゾウハー『復讐者たち』広瀬順弘訳（早川書房）1989, 152 頁。
- 40 同上, 150 頁。
- 41 同上, 154 頁。
- 42 Steinacher: Nazis auf der Flucht, S. 237ff.
- 43 1976 年から 1983 年までの失踪者の数は 1 万から 3 万程度と言われている。参照：杉山知子『国家テロリズムと市民』（北樹出版）2007, 10 頁。
- 44 Rainer Kussler: Gottschalks Enkel in der neuen Welt. In: Etudes Germano-Africaines, N°14/1996, S. 57f.
- 45 Uwe Timm: Reise nach Paraguay. In: Armin Kerker (Hg.): Im Schatten der Paläste. Frankfurt a.M. 1987, S. 105ff.; In: Martin Hielscher (Hg.): Uwe Timm Lesebuch. München 2005, S. 129ff.
- 46 Uwe Timm: Erzählen und kein Ende. Köln 1993; Uwe Timm: Von Anfang und Ende. Köln 2009; Manfred Durzak: Die Position des Autors: Ein Werkstattgespräch mit Uwe Timm. In: Ders./ Hartmut Steinecke (Hg.): Die Archäologie der Wünsche, Köln 1995.
- 47 Ingo R. Stoehr: »Eine Entdeckungsreise ins eigeneBewusstsein« Eine Unterhaltung mit Uwe Timm. In: Dimension2 Vol. 2/3, 1995, S. 338; Durzak: Die Position des Autors, S. 341; Uwe Timm: Von Anfang und Ende, S. 40.
- 48 Stoehr: »Eine Entdeckungsreise ins eigeneBewusstsein«, S. 338.
- 49 Timm, Von Anfang und Ende, S.41ff.; Durzak: Die Position des Autors, S. 334.
- 50 Stoehr: »Eine Entdeckungsreise ins eigeneBewusstsein«, S. 338.
- 51 松下マルタ「アルゼンチン文化の諸相」, 87 頁。
- 52 Kussler: Gottschalks Enkel in der neuen Welt, S. 56.
- 53 Hielscher, Uwe Timm Der schöne Überschuss, S. 238.

- 54 ビル・アッシュクロフト+ガレス・グリフィス+ヘレン・ティフィン『ポスト
コロニアルの文学』木村茂雄訳（青土社）1998, 13頁。
- 55 Lützelre: Bürgerkrieg global, S. 277.
- 56 Timm: Erzählen und kein Ende, S. 82.
- 57 Ulrich Simon: Die Leistung des Scheiterns: Widerstehen als Thema und als
Problem in Uwe Timms Texten. In: Friedhelm Marx (Hg.): *Erinnern Verges-
sen Erzählen: Beiträge zum Werk Uwe Timms*. Göttingen 2007, S. 203.
- 58 Egon Schwarz: Der Schlangenbaum. *Uwe Timms »post-kolonialer Bildungs-
roman«*. In: Helge Malchow (Hg.): *Der schöne Überfluß. Texte zu Leben und
Werk von Uwe Timm*. Köln 2005, S. 36.
- 59 Parl Sars: *Uwe Timm: Der Schlangenbaum*. In: Deutsche Bücher 16, Heft1.
1986, S. 276.

Zu postkolonialen und interkulturellen Aspekten in Uwe Timms *Der Schlangenbaum*

Miyuki SOEJIMA

》Der Schlangenbaum《 (1987), Uwe Timms fünfter Roman, wird in den letzten Jahren unter dem Aspekt interkultureller Germanistik interpretiert. Aber interkulturelle Konstellationen der Gegenwart müssen zuerst im Kontext des Postkolonialen begriffen werden, denn interkulturelle Konstellationen finden in einem Spannungsfeld statt, das seit dem Beginn der Neuzeit durch das Phänomen des Kolonialismus gekennzeichnet war. Das ist auch bei diesem Roman der Fall. Die postkolonialen Aspekte dieses Romans könnte man in folgenden drei Punkten zusammenfassen.

1) Unterdrückung der Indigenen: Wagner, der Protagonist des Romans, ist Experte von Tief- und Hochbau, und übernimmt die Bauleitung einer Papierfabrik in Argentinien. Er wohnt wie ein Kolonialherr zusammen mit europäischen und amerikanischen Experten in einem Wohlstandsviertel. Dort gibt es auch eine große und reiche „deutsche Kolonie“, während indigene Arbeiter in menschenunwürdigen Verhältnissen leben. Indigene Kultur und Leute sind durch die „Europäisierung“ des Landes als Immigrantenpolitik Argentiniens verdrängt und unterdrückt.

2) Militärdiktatur mit deutschem Hintergrund: Die Militärjunta des Landes führt einen schmutzigen Krieg gegen jede Art von politischen Gegnern. Sowohl Wagners Spanischlehrerin und Geliebte als auch sein Indianer Dolmetscher fallen ihr zum Opfer. Der Militärbevollmächtigte für Wagners Stadt ist Sohn deutscher Einwanderer und hat an der

Bundeswehrakademie studiert. Das erinnert daran, dass südamerikanische Armeen von der wilhelminischen Armee trainiert wurden.

3) Entwicklungshilfe als neue Form von Kolonialismus: Die Papierfabrik, die nicht nur Einheimischen gar nichts nützt, sondern auch die Umwelt zerstört, wird mit deutschem Kredit finanziert und von einer deutschen Baufirma gebaut. Dennoch ist dieses Bauprojekt durch Korruption zum Scheitern verurteilt: das Fabrikgebäude wird in fünf Jahren im Morast versinken. Dabei ist dieses schlecht geplante Bauprojekt kein Einzelfall im Lande. Entwicklungshilfe ist eine getarnte Form von Kolonisation, denn Industriestaaten bereichern sich auf Kosten von Ländern der Dritten Welt.

Konfrontation mit der fremden Kultur ist auch ein wichtiges Thema. Die Schlange wird hier als Symbol des einheimischen Aberglaubens und als Leitmotiv benutzt. Gleich am ersten Tag überfährt Wagner eine Schlange, an die sich der Aberglaube knüpft, dass der ertrinkt, der sie tötet. Das macht seine Zusammenarbeit mit den indigenen Mitarbeitern schwer, denn sie glauben, eine Macht - und keine gute - verstecke sich hinter dieser Tötung. Nachdem Wagners Geliebte verschwunden ist, sieht er einen Schlangenbaum am Ort eines früheren Gefängnisses. Wer dieses nicht mehr verlässt, der ist von einer der Schlangen, die angeblich im Baum leben, gebissen worden - so erzählt die Legende. Nachdem sein Dolmetscher auch verschwunden ist, lässt das sich auch so deuten, dass Wagner in die Verstrickungen des Schlangenbaums geraten ist und nicht mehr entkommt. Was soll ein aufrechter und gutwilliger Deutscher vor dem Abgrund tun? Seine Fabrik wird versinken und die beiden für ihn wichtigsten Menschen sind verloren gegangen. Die Frage bleibt offen und für Leser ist es das ein interkultureller Lernprozess.